TOWN

祖母・傾・大崩 ユネスコエコパーク シンポジウム㊦

10年後への提言

2/20

■コーディネーター
岩本俊孝さん（宮崎大学名誉教授）
■パネリスト
中原史貴さん（祝子川温泉美人の湯管理人）
西京子さん（フォレスト・マントル上鹿川事務局）
宮田靖さん（県むかばき青少年自然の家所長）

岩本さん　これから10年後に向けて何をすればいいと考えますか。

中原さん　大崩山や比叡山の登山口に止まっている車のほとんどが県外ナンバーです。宮崎は1割にも達しません。県外の人から「宮崎はいいな」と言われますが、県民の関心は薄いようです。

地元の人が通うことで山への愛着が湧き、自然の保護活動に参加したり、ガイドをしてみたいという気持ちになるのではないでしょうか。そうすれば後継者問題も解決し、ひいては移住者の増加にもつながります。

子どもたちにはもっと野山を駆け巡ってほしいと思います。エコパーク登録によってアウトドアを楽しむ機会が増えれば、その子どもたちが10年後に何らかの役割を担ってくれるのではないかと考えます。

西さん　上鹿川の森林自然環境を次世代に伝えることが必要です。地元の人たちは、自然がいつも当たり前にあると思っています。ところが、当たり前のものの中に入っていくと気付くことがたくさんあるのです。

愛情を持って楽しみながら自然と関わり、そこに暮らす人たちと話をすることで知ることがたくさんあります。一歩入って暮らしの豊かさ、森の恵みのありがたさを感じてほしいと思います。当たり前の中に本当にすてきなことがたくさんあります。ぜひ山の中へ出掛けてください。

宮田さん　子どもたちに自然体験活動をたくさんさせ、心を育てることが大切です。エコパークを含む自然、環境教育を学校教育の中で制度的にやっていくことが必要です。

県民の関心を高めよう

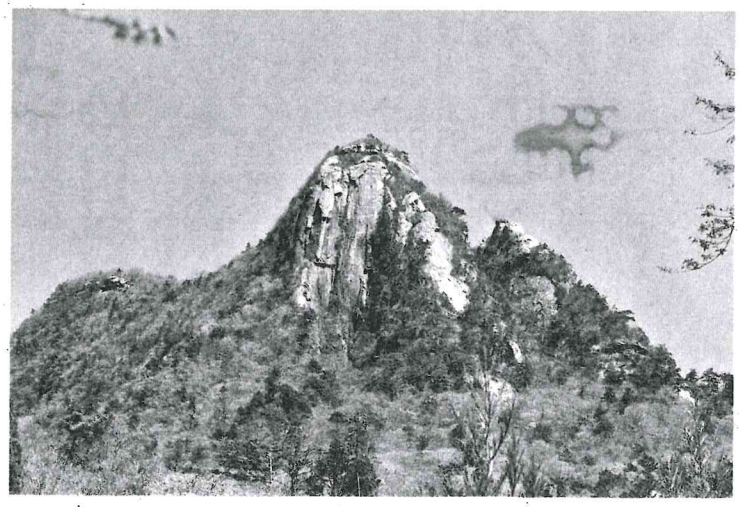
受け入れ体制の整備も

自然の大切さ、人と自然の関わりを学ぶことで自分たちの郷土や町に自信と誇りを持たせることが、エコパークを次世代につなぐことにもなります。むかばき青少年自然の家も連携し、やれることをしっかりやりたいと思います。

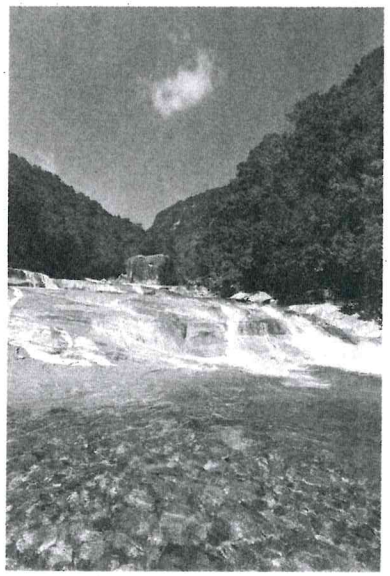
岩本さん　子どもへの教育や受け入れ体制の整備が大切です。地域外から若者を受け入れ、そこで生活ができるサポートをお願いしたい。また、高齢者には、地元の生活や文化を外から来た若い人に伝えてほしいと思います。

延岡市を中心に活動する人たちの点と点の集まりができれば、日之影、高千穂町、大分県側ともつながることができます。交流の場をつくることがエコパークの発展にもつながると考えます。

行縢山山頂からの眺め。眼下に県むかばき青少年自然の家。遠くに延岡市街地と日向灘が望める



鉾岳。山腹に日本最大級のスラブがあり、ロッククライミングの聖地といわれている



澄んだ水が花こう岩の一枚岩を流れる祝子川渓谷。春からはヤマメ釣りでにぎわう

鬼の目山に自生する天然杉（戸高正男さん提供）

ユネスコエコパーク

国連教育科学文化機関（ユネスコ）が昭和51年に設けた制度。正式な名称は「生物圏保存地域（BR）」。より親しみを持てるよう、国内では平成22年から「ユネスコエコパーク」と呼ばれている。

目的は「生態系の保全と持続可能な利活用の調和」。同じユネスコのプログラム「世界自然遺産」が手付かずの自然を守ることを原則とするのに対し、「自然と人間社会の共生」に重点を置いているのが特徴だ。

国内では「祖母・傾・大崩」と綾地域の県内2カ所を含む9カ所が登録されている。

2019 2.20

風車作った

2/20 延岡しろやま支援学校 花物語を彩る

延岡市の五ケ瀬川堤防で23、24日に開かれる「延岡花物語・このはなウォーク」の風車アートに、今回初めて延岡しろやま支援学校の中学生が参加している。実行委員会が用意した材料を使い、一人ひとりが赤い風車を作り上げた。

今年で3回目となる風車アートは、市内の中学生が計3千本を製作。五ケ瀬川右岸の堤防約150メートル区間に「のべおか花物語2019」の文字と桜マーク、県のシンボルマーク「ひなた」を描く。

風車はこれまで厚紙だったが、今回からポリプロピレン（PP）に変えて強度をアップさせた。

延岡しろやま支援学校では14日、たいよう部門（知的障害）の中学部約15人が作業に参加。先生から一つ一つの工程を教わりながら、はさみで図面に合わせてPPシートをカットして羽根の部分を作り、ストローの軸に通して完成させた。

完成した風車は岡富中学校に集められ、きょう午後、会場で設置作業が行われた。

完成した風車をテストする延岡しろやま支援学校の生徒（同校）

国土交通大臣表彰

手づくり郷土賞受賞祝う

2/20 北川町の川坂川を守る会

延岡

国土交通省の平成30年度「手づくり郷土賞（一般部門・国土交通大臣表彰）」を受賞した延岡市北川町の川坂川を守る会（安藤重徳会長、30人）の受賞祝賀会が17日、会員や地元住民、来賓ら約70人が出席して同町の川坂母子健康センターであった。

あいさつに立った安藤会長はこれまでの取り組みへの支援、協力に感謝を表するとともに、「この賞は多くの方々のサポートで成し遂げられたもの。栄えある賞を頂いたことは地域の誇り、地域住民の自信になる。もう少し活動を続けていきたい」と述べた。

来賓の読谷山洋司市長は「営々とした取り組みに心から敬意を表したい。お手本になる取り組みを全国に知っていただき、次の世代に大切なものを引き継いでいかないといけない」と、取り組みの充実、会の一層の発展に期待を寄せた。

乾杯に続き、女性会員らの手作りの料理を囲み歓談。出席者らは、これまでの取り組みを振り返り、苦労やうれしかったことなど思い出話に花を咲かせ、受賞を共に喜び、決意を新たにし合った。

手づくり郷土賞受賞祝賀会の出席者ら

同会は、同賞応募に際し「川坂湿原を生かした地域おこし～霞（かすみ）堤とともに歩む～」のテーマで取り組みをアピール、グランプリにはあと一歩及ばなかったものの、社会資本を有効活用しての積極的な地域づくりが高く評価され、見事国土交通大臣表彰に輝いた。

同会は、平成22年に発足。「自然と人が元気な里地・里山づくり」をテーマに、湿原と霞堤を生かした取り組みを続けている。

2019.2.20